平新報

發行日 月三回 5.15.25.日發行
編集兼發行印刷人 山野邊庄吉
福島縣磐城市大字岩出字向二八
發行所 平新報社
一部定價拾円送料八円
廣告料 一行 五十円

平市二丁目
關内油店
關内正一
電話一六番

思考の秋

破邪顯正・啓發運動

關内正一氏、代議士立候補 断念?しても平新報刊行は續ける

平新報社長 山野邊眞立

◆齋藤晃氏この人は他人に損害を與える事を平氣でやる人だ。かつて私にカヤ約五千を注文して道途上契約解除方を申し渡された、いや、後売り捌くに苦心したものだ

◆故山野邊義政氏本紙再刊第一號を出すに加納で刷つた、……で義政氏が印刷費三千円を負擔してくれる約束だつた加納(佐藤さん)へは氏の長女をくれて居る。氏は死ぬまで約束不履行だつた即ち不渡り小切手だ

◆上野賴榮氏四年前赤井嶽へ登つて、再刊の賛意(サイン)を求めて快よく署名してくれた後でとの話しで今日に至つて居る、その間何回も氏と途上週つて居る不渡りかな

◆比佐政種氏を漁業組合に訪ねて賛意を求め署名したが、ある言葉の行き違えから當方で署名を取消した然し、再刊以來四年間平新報を郵送したので新聞代を請求したが言を左に右して支拂わぬので今後前號から郵送を見合した左様なら

高野益造、西丸一、西丸猛山部正勇諸氏は○は「いらぬ」の前提の下に署名を願つたのだから賛援金は當方から請求出來ぬ

◆關内正一氏

再刊は頭初から反對なのだから再刊平新報として發意をもとめねば又署名をうける氣持はない、但し一方的だが氏の宣傳は大いに力めた又郵送もしておく、然し今後は關内油店として宣傳する心算である、理由は關内氏は代議士に立候補はせぬらしく、油商として昔に還つて業界に活躍するらしい、御繁昌を心から禱ふと共に捲土重來! 立ち直つたら、諸橋久太郎氏とともに公選(第一回、鈴木辰三郎、第二回諸橋久太郎、第三回全氏)第四回平市長(この頃までは五市合併せぬとも限らぬ)立候補關内正一の實現の夢を見て居る。守次さん同じ夢を見てくれ給へたのむ、三選はやめて欲しいです。兎に角、伊藤秀吉助役翁は評判が悪るい事務助役としては大したものらしいが、翁はあまりに感情家らしい、關内の選擧開票や其の他で露骨な仕打ちを暸されて居る、大平市の助役として平市から(保守系)關内氏當選に非協力であつたという事は翁の氣持が感情的で眞に平市發展に忠實でない…時の諸橋氏は極力關内當選に全力をあげて居つたのに、どんな感情の問題があつたか知らぬが秀翁の言動は、今もつて心ある平市民から批判!と非難されて居る、それで諸橋久太郎市長實現にのみ暗躍したのは虫が良すぎるどうだね秀翁、丹後澤の眺めは良いかね、少し登つて行くと野崎滿藏氏の四ッ足の門が目新しく控えて居る。然し滿(みつ)おんちやんは敗軍の將はどこへやら兵法語らず、こつとうと○の考えをして居るらしい、惜しかな視力が充分でなく燈火に親しむの秋を味い得ず、思考の秋の心境に在る事は實に氣の毒である、其處へ行くと諸橋元三郎氏は三猿文庫として「心石」として、会計さん(だれでも会計と呼びすてにはせぬ様だ)二八会の柱石として友情と趣味それでいてかくれた政治家今では選擧も千軍万馬、當に入つたもので、但し裏面には立候補せぬのだから仕末が悪るい、勿論一家で賢兄市長と公職を爭うたのでは愚弟となる、これ時、昭和卅一年十月十六日(舊九月十三日)午前四時、炭礦のボーがなる、虫の聲チヨロ〳〵悲哀の極(曲)誰れか斷腸の思ひせざらんで、殊に本日は舊の九月十三日で昔は氏神祭りでヘイソクを入れる日で各々一家では目出度い日なのである、その一家の先考は死して五十年過ぎると墓所に居らず現世に住んだ、家に戻つて氏神様となる、日本は神の國神佛こんこう氏神祭りは先祖の祭りなのである、舊では今晩はウラ月見である、八月十五日は月見様九月十三日はウラ月見様、今晩は時れてほしいものである。朝鮮から生れた岩出に崎つて種々家庭の事情あり平に出で平新報發行ー平生活ー平は町から市へ歸農して大東亜戰のため平は空白にした然し平は私の第二の故郷である、揚土台の磐中時代!!! 平新報の創刊時代、關内正一家の二階生活!佐野屋旅館故腰塚小彌吉翁弓道の達人生活磐中同窓会の常任幹事磐城劍道会幹事小野寛美先生が中心磐城柔道有段者会長諸橋久太郎、(全副会長橋本芳太郎)先生、廳崎正見、寄田目源一郎、中野康平、相馬、双葉の有段猛者連、故加納治五郎先生を迎えて平劇場から住吉屋本店二次会は松本その間活劇あり武勇傳あり)磐中同窓會二八会磐城弓道会等々思いはつきぬ、平新報主催で勤續店員表彰を御大典に公会堂で催した。その折の講話をした鈴木積善氏も故人となり釜屋の本岡氏磐屋の木澤氏も故人となつた昭和四年妻帶して南町に居を控えた(家主越の家)大町六番地諸橋敬一郎さん裏で長子泰秀が誕生、四町目(家主故鈴木長三郎氏)一町目(家主釜屋商店)今岡田弘成氏居住、一町目生活の折赤井嶽があか〳〵としてやけた、その折大原德藏院の渡邊さんは赤井嶽に居つた筈、佐野屋生活中磐銀破產、草野順平、諸根棹一、蓮沼龍輔諸氏の言動谷口樓、谷口仁太郎、鈴木照助全邦三郎、坂本隆藏、大一屋主人の丹野さん、坂田金物店主の坂田織助さん坂田さんで思い出すメートル展覧会時の増田義夫師はどうして居るか何と申しても平生活は、關内正一、諸橋守次、全元三郎、三氏に直結して動いて居つたものだ、故に關内正一批判が筆の趨(はしり)でここまでかいて了つた、時のアブおんちやんの昔の元氣に還つてほしい、人生はまだ〳〵遠い!いや、關内氏の長子淳一郎氏は帝都に在學中である、渡米、渡滿、私らの見ざる所を見聞きし、言論の府、帝國議会の檜舞台に何々委員長として正しく戰つて來た筈である。大いに自負して欲しい、人生は意氣に感ず誰れか功名を論ぜん等と昔のセリフは申し上げぬ、捲土重來は文字通り大いに商魂を過去の体験を生かして、磐城柔道有段者会長として体當りで八艮すべく念願して筆を擱く

追記、關内正一さんの終生の願望たる代議士立候補を斷念? せる事は實に涙なくして考えられぬ、然しこれも時勢時の流れの然らしむる所で、彼も亦、家庭の人、子供らの良きパパであり良き夫であり、殊に義母おばちやんに對しては實母以上の孝をつくして居る、正直な人、曲つた事は大嫌い、こんな事は故大平正次氏も似て居る。自分が正直だから他人を全面的に信じて得票等も失敗するそれで組織がない、古きを遠ざけ新しきを求めアフするものにワザワイされる、諫言を入れる雅量が足りなかつた票よりは資金の方へ重きを措いたのじやないか、要は今の票を集める政治家でないそれで政敵が多くその政敵は皆々策士である。野崎滿藏氏の如く故鈴辰派流者共は氏に眞から好意を持てる筈がない。木村守江の事務長振りでも判かる筈だ。それを好意があると信ずるのが氏の正直すぎるクセでなのだ社会黨の如ぐ組織黨は別として頭のカルイ人は當選するのだ、出來ても出來なくともその人を利用?する氣持をとり上げてこまめに努力するその努力が足りなかつたのだ。港灣國道がどうのと大局的に大いに國家、國際的に氏は努力したろうが、大衆にはそんな事はどうでも良いので感謝の念がない、それよりも刑犯でこまつて居る是非すくつて臭れとたのむ……それが法的に服罪しても最善の努力をしてやればその人は感謝する。それは一票は萬票となることでプラスはマイナスとなる筆者は常に云う世に不正な人は八割で正義觀念の強い人は二割位のものだ。蟻はあまきにたかる氣持の集合である貫かる事。なら平常喧嘩をしても一緒になる私の住む岩出がそうなのだ、にがい体験と實例がある兎に角畏友關内正一氏の代議士立候補斷念?の心境を洞察して、(筆者が平新報續刊をやめる様なもので、然し私は絶對に死ねまでやめぬ)彼が一生をかけての代議士立候補斷念は健康そのものが一大原因であろう、大竹知事の幹事長の折、氏は支部長をして居つた知事になる氣ならとうにその機会はあつた定期預金の參議員でも市長でも然りで彼は代議士以外に望みがなかつたのだ、この意味で彼の斷念の決意が並大体でないことが判る彼を支持した。濱三郡七萬人に代つて代書するとともに彼も亦過去の關内支持者に關内と投じて臭れた人々に感謝で胸一杯であろうと推察することに殊に感謝せしねばならぬ一事は、關内の選擧に際し心ならずも違反に問われた選擧犠牲者諸彥には筆者(眞立)關内家、家族親族一同に代つて衷心から御詫をする。筆者は前記した如く關内家二階に丸一年間チヨンガ時代關内家、家族同樣くらして居つたものだ。今以つて筆者は自稱關内家の家族と自分ではおもつて居る、かるが故に關の家立直りにはあらゆる角度で戰いたいが、公私はこん同せぬ心算で票を得るための努力は樂になるに迪れ破邪顯正の筆は自由に振いる事になつた事は關内正一氏代議士立候補斷念?に破邪顯正の筆は反比例して遠慮なく進め得る事を關内正一氏に衷心感謝する(眞立)

◎本居宣長は歌つた
おうかたは月をもめでじ、これぞこのつもれば人のおい(老)となる
これは月見様毎にこの國學者は歌つた相だ一休禪師は
門松やめいどの旅の一里塚日出度くもあり目出度もな

◎反響 音信交換◎

平市大町九 諸橋敬一郎

拜啓中秋の候、いよいよ御清適の事と、御喜び申上ます。

私事、長らく療養しておりましたが、御蔭様にて大層良くなりましたので、御芳情のほど、まことにありがたく厚く御禮申上ますと共に、心ばかりの快氣祝を、致しました。併し今後も、なお當分の間十分靜養致したいと存じますので、よろしく御願申上げます先づは御禮まで 敬具

昭和三十一年十月吉日

× ×

磐城市島 鈴木茂雄

十月九日

拜啓時下仰せの通り大部涼しくなりまして、誠にしのぎよくなりました、其後は益々御壮健の御事と推察して居ります。

さて昨日御葉書により御申越しの件、小生が小名濱農業会の資產處理は致しましたが、組合の書類は一部たりとも持參致さず、資產處理に關する書類のみにてあれにより三部を作成し一部は懸廳、一部は發記所一部控として長瀬会長に渡しましたが小生の手許には只今何もなく小生が作成に對する手控だけにて組合へ屆けるものは何もありせまんので右様御了承下さい 先づは返書まで。

右に對し小生より私(眞立)より「資產處理に關する書類」が時の玉協組合長として法的に農業会は野田の八合に在り 鈴木氏は全事務所にて書類作成が當然であつたが、その時は鈴木氏は野田の事務所では事務をとりがたく(石井幸平氏らの壓力があり)書記の小泉とし子さんを島の鈴木氏自宅にて事務をとつたらしく、私としては其間の狀勢を察してコツに二つ鈴木氏に渡したものである、故に處理が終つたら資產處理に關する書類は當然会の事務所たる野田八合現玉協事務所へかいして保存すべき性質なので屆け方を鈴木氏に乞うたワケである。

この書類一切を長瀬会長に屆けたとすれば、鈴木さんの屆け方は方角違いでそれは会長自宅へ屆けるべきものでなく、事務所へ屆けるべきと私考するものであるこんな意味のハガキを折返し鈴木さんに送つたのだが何ら返事がない、鈴木さんから長瀬会長自宅へ屆けた書類一切をとり返して組合事務所へ屆け方を本紙上でお願い致します。

× ×

常磐市湯本三函一五○ 鯨岡 潔

前略十二日附貴書翰拜承遠慮なく有効に此際御利用可然かと存じます。例の件、民刑共大いに進展の報各紙で拜見貴兄の陰の御努力、社会的に有意義であつた事誠に大慶に存じます。私は今常磐市飯塚税務課長に「市税賦課白書」の公表を申請中です。これは炭礦地帶に於ける固定資產税及び鑛產税の對象物件の標準價格の決定が利害炭礦の政治的壓力下に置かれて市の財政的シワヨセが炭礦外の住民に轉嫁される全國的傾向に對してその矯正を要求したもので私の計算では一倍位の出收可能の税額があると思われます。箱崎君等に科學的調査方依頼願い度、右併て申し添えます、向寒厨一層御自愛を!!! (潔)

十月十三日

× ×

江名 沼田春吉

十月十二日

拜啓清涼の砌り愈々御健勝の段、お慶び申し上げます扨て毎度御恵送下さいました。平新報代金の一部として二〇〇円同封致しましたから、御受納願います。思考の秋、諸君のシーズンで報道陣も繁忙の模様ですが折角御健斗を祈ります。

匆匆 敬具

賛援 平新報續刊

平市才槌小路 阿部政右衛門

平市舊城跡 野崎滿藏

大村屋旅館 大村一郎 平市二丁目

會席 谷口樓 平二 電話八番

谷口ふく媼

平市二丁目料亭谷口のおばあさんは永らく病臥(本紙既報)して居られたが、十四日朝永眠さる、行年八十三才葬式は天理教葬で十六日葬送された、天氣は良し会葬者多く殊に女性が多く、谷口樓から西一丁目から紺屋町に(火葬場)向つてのゝびきであつた。媼は三年前山形屋二階で謠曲をうなつた事がある、これが筆者の聞きじまいであつた御めいふくを祈る

会葬余談、硴石は谷口樓、中宿は他家を借りる必要なしか同樓二階、三階六角の室は天理教齋主平澤福太郎他二十名から上つて行く小名濱の高木忠次氏(故長治氏妻即ち女將保子さんの實兄)紋付袴服で挨拶で小名濱の会葬者に挨拶故小島彌太郎氏夫人も居られた、此の夫人は何でもサダ子さんという西郷大平忠一郎氏の妹で長女は住吉屋支店故酒井清氏の長子清一氏の良き配遇者として嫁して居る筈、時の磐女を出て居る筈筆者を知らぬと思つたら知つて居つた。喜多勇さんも横濱から來て居つたこのねいさんは平に居る時何でも和歌をやつて居つた、磐銀の破產頃、草ぱら○○しやれる次は姪は山野邊で小名濱出身、時の藝名は忘れたが三井男爵や蓮沼さんの居つた所で小富という料亭のマダムなそうだ、喜多子、湯本で野菜商をやり勇敢にリヤカーをしつぱつて居つた妓、今は平で運輸事業だそうだ、だんなさんはまだ〳〵居る皆皆三十年振りで会つた昔の人である。吾が社に居つた宍戸氏も來て居た、下足番に奉仕、葬列が初まると華わが目立つ諸橋市長、關内油店がおれの目には入る岡田政次郎、井上貞治郎消防團係金ピカの正服老團長、署長、野澤いわき民報社長、關内正一前代議士和服姿で、何だか故三木武吉翁とまちがいられるやせた、今日のふく媼の孫女港から婿入りした若夫婦の月下氷人は關内氏ではなかつたかな……今業界で羽振りをきかして居る大爲屋主人も居つた、事務所は南町だ數回氏を尋ねたが南町へは行かぬかつたあわれぬ筈だ、林城の農地開放の話も出たなかなか思い切つた處理をする人で今日彼の大をなすもこゝらにあるらしい、馬目誠氏とも行を共にするネズミ坂下を通つて故安齋信義氏を相互に追悼する、薄途伊關の若亘那に案内されて天理教墓地を拜んだ、こゝに祭られて居る人で故藤田榮助氏親子の靈に親しく合掌した、伊關房次翁は數日前より病臥して天理教信者として今日の盛儀に參列得ざりしは、さぞ殘念であつたろうと推憾する、野武氏は平に來て二十五年になり本籍も平に持つて來たそうだ、慾慾平の煙となる決心をしたかこの頃の關内の選擧では野武氏は忘れられぬ、彼はプラスだつたかマイナスだつたかは世の批判に任す、兎に角この頃は愛きようが良くなつて來た様だ再び縣議に立候の準備かも知れぬ、平常が肝心だ……票をかせぐには自我を捨てねばならぬ夫人を少し教育してかゝれ、致見等と何でも良いのだ數に於て勝てば良い時代だ、制限選擧でない普通選擧を忘るべからず、兎に角故ふく媼は大した魅力があつたものだ、三十年振りで会つた人々はあとは現世ではあいぬ事は決定的である。これを否定し得る勇敢な人は居るまい、ふく媼の年令は八十三才、やすさんがいうのだから筆者は信ずる。

鳩山訪ソ反訪ソ裡下の日本人に告ぐ

吉田庄太郎

一、人物側

必ずしも、トインビーではないが、今は試練に立つ文明の批判時代で、原子力時代といへオートメイション時代ともいわるし周知の世代に於て、鳩山首相とは果して如何なる人物であろうか、否、政治家であろうか、政治家政治を知らずで虚榮的政治家ではあるまいか。云う所の虚榮的政治家とは、孔子ではないが、知られざるを憂えて知らざるを憂えぬ人の別名だからである。

それ知られざる憂うるとは、虚榮人の特質で貪慾人であり、性慾人であり、權力人の別名だからである。されば知らざるを憂うるとは、果して如何なる人物の定評人の事であろうか。それは眞實人であり、精神人であり、理性人であり、モデル(Model)人と言う可きものだからである。一は、社会性人であり。一は理想性人だからである、由來、人には高下なし心に高下あるを知らねばならない。この心である今は、一般に金標に囚われて、この至寶たる心性を忘却してるのである、否、物や金に囚われて魂を失わんとする危機時代即機械化文明時代なのである。飲み買う打つの原子力時代なのである、否、オートメイション時代なのである。それ流行宣傳(言)の虚榮斗爭戰化も無理もないではあるまいか、或はこれは社会性の發露だかも知れない、併しこの社会性である今の資本主義とか、社会主義とか共産主義とかの囚われた意味の社会性ではなく吾人は社会とは人類なりと定義化するのである。この大人今やなし今ば有像無像の小人許りではあるまいか

心の師とはなれ、心を師とせざれで、大人とは心の師とはなれる人物で小人とは、心を師とする虚榮人たるを知らねばならない、榮枯盛衰は虚の一字で、家を亡ぼし國を亡ぼすも、虚榮心たるを知らねばならない國思う心は一つ君思う宇宙精神は魂で、魂なくして何の領土やあり得る、その魂とは、なるようにしかならぬものだから無理してはならない。無駄してはならない、油斷してはならない、ないはなる大人物ぞ天や知る日の本日本人は魂ではないか、あゝ魂なる哉である堅じて物や金ではない、割り切るは魂に限るからである、唐家とかく三代目で魂の繼承性を誤解しては生命は判らない。心せねばならぬことである。

二、政府側

茲に政府側と言う、これは必ずしも狹義の意味ではなく、廣義の意味で勿論、現政府を中心として中央地方の首腦をも論ずることゝする。

今や訪ソ反訪ソ問題ほ、何を物語る代物狂言なりやこれは一言につく政治の貧困性のバクロたりと言う事が出來る、否、眞の政治家でなく何れもがドンクリの背クラベで、これが眞に統一性を欠くがためである、政治であろうが教育であろが眞に、統一性を失つては、それは當一の暴力化で一致も協力も自由も生長するものではない、それ統一とは天の象徴たるを知らねばならない、天なくして如何なる領土やあり得る、領土なくして如何なる人物やあり得る、その人物の排底に政府あり、閣議あり、議会あるがために幾多の活劇があるではないか、この訪ソ反訪ソ問題もだ、根本は外相農相の勢力争いで何れが眞乎、何れが僞乎かで感情問題の惹起する處にこれが震源地があるではないか忘れもせぬ、去る三日午前十時三十分羽田空港で出迎えもせぬ農相ではなかつたか、禮義は必ずしも儀禮とゴマ化しては日本人の資格はない、又、派閥に囚われて主流派反主流派の大切な会議に外相をソ外した事實を新聞は報ずるではないか何と言つても日本の外交問題とスイズ問題とは、今や世界の二大問題たる花型役者で、米大統領戰以上の世界的人氣を知らねばならない、それを何ぞや、それをしめ感情問題や派閥問題に囚われて、これが統一性を欠き茲に、無理無駄油斷のスキがあるとは何たる哀れむべき現象ではあるまいかこれ何れもが金權に囚われて已が位置の延命策に外ならぬと言われても過言ではあるまいではないか、否、私心のハツロで、公心の意亡心ではないか、善政を布かんとせば一惡を除くに如かずで須らく善とは、忍の一字からであり、惡とは意の一字からなる眞理性の追及を研究せねばならぬものではないか、終戰後十一年目、今日の權實雜亂戰は和の一字からで天の時は地の利であり、地の利は人の和で中央も地方も政治も經濟も教育もこれが原理性は一つではないか、思えば一プラス一は二ではなく、一プラス一兆は一性ではないか再考せねばならぬ危機ではないか、知らねばならぬ爽機時代ではあるまいか、噫

三、國民側

古歌に、上は出ず中は日反り下は一夜二夜と三夜は下々の下の人と言ふがあるこれは封建性の遺物なりと冷笑してはならぬ今は、勿論テレビラジオの文明開化の世の中ではある、乍去、宇宙とは通信機關なりと言つてもよい否、宇宙とはコトバ也であつて天聲人語と日々朝日紙は報導するではないか、今日は九月の七日で火星が地球に大接近すると云う、接近といつても五千六百六十万キロメートルでそれが地球にとどくのに三分間だというから秒速三十万キロの光が一年かかつて進む距離を一光年というが何萬年も前に光つた光がようやく今ごろになつてわれ〳〵の目に見える三分間儚ない夢のような三分間ではないか。あゝ三分間、あゝ人生僅か五十年、あゝこれ端なる五十年であろうか否、眞の人生とは一日で必ずしも壽の長短ではない、徒手徒食何の價値やある、生命は一日で足るからである、

Xの悲劇を知らねばならない。生老病死の悲劇を知らねばならない、金光教祖は坐つたまゝ何十年も外に出た事がないと云うではないか、キリストはサマリヤより二里四方外に出た事がないと聖書は教ふるではないか、須らく人は外許り知つて内を思う人は餘りにも少いではあるまいか、否、時を知らぬではあるまいか暇なしとして文讀まぬかなとは何を教ふる金言であろうか、時を知らぬ怠忘人の娯樂人達の特權ではあるまいか勿論、人は國民は娯樂と興味とを混同してはならぬものだからである、上見ればあれほしこれほしほしだらけ下見てくらせほしきものなしで、可視性も微分性も無限だからである。要は中性の人生觀にある、上は出ずにある中は日反りにある、下は一夜にある、二夜と三夜は下々の下の人であり國民たる自覺性なき下人であり、小人たるを知り思はねばならぬテレビラジオの世の中だからである、それ運動、それ陳情、それ補助云々才々で飛び歩く事は自力であつても他力ならぬを知らねばならぬからである。否、人物といへ首腦といへ國民という、これは小をかねた大人物であり、大首腦であり、大國民たる可きに事實は小說よりも奇也で何れもが金權夜叉で、虛榮で形式的で然も、一片の誠意なく熱の欠乏貧困性の發揮現象に氣付かぬ金權的モーロク人の下々人許りではあるまいか、それ果して杞憂乎。噫々(三一〇九、七の三分間を記念して七軒町にて)

吉田先生の寄稿掲載については讀者から種々批判があるがかく努力を考えて掲げることにした。野崎さんのもその意味で野崎氏の了解を得ていづれ掲げる事にする

駒忠旋風!!! 愈々!! 平八幡小路へ…

刑事事件は近日呼出し、民事は十二月十日頃公開公判となる模様!

駒忠事件二重売はその後どうなつたか、それは判る然しどうなるのだと聞かれては私には判らぬ、法に訴へた以上、裁判官と辯護に士任かすより外に術がない

刑事事件

「履報」磐城警察署では磐城市高山の土地三千百七十三坪の売買問題について常磐化成KK(平市三丁目)代表取締役駒木根忠敬氏から出された磐城市助役中田佑一郎氏(江名)全市議会議長長瀨彰義氏(林城)鑛山業草野惠正氏を横領と業務妨害續いて背任罪として追訴して居つたが此の程取調べ完了十月十一日書類送檢された

一、常磐化成に売ると約束したこの土地を代金の約束手形支拂日八月卅一日を待たずに草野惠正氏が約束を破つて常磐炭礦へ売つたもの文字通り二重売りである

一、中田助役と長瀨議長は草野氏と常磐化成の間で斡約書を取交わしたとき立会したのに約束を破つて草野氏へ協力して常磐炭礦へ売るのを世話したもので、地位を惡用した事がこれ又文字通り任に背く、背任の罪に問われたものである、この刑事事件は平檢察廳檢事柏木支部長が、近日中原告被告を呼出して(多分同時だろうと思う)起訴か不起訴を決定するであろう。

民事事件

「履報」磐城市議会では十五日、午後二時頃か、市会議室で臨時市会を開き應訴するかどうかにつき協議した結果、

應訴する事に決定、條件として應訴費用その他一切の費用は市は關係せず、關係者に於て支拂うこととし、その手續きその他は總務委員会を中心として構成した十四名の應訴對策特別委員会が當る事を申し合せたと

一、一方被告の一人常磐炭礦社長大越新氏の方ではどうなつて居るか今の所情報が入つて來ぬ、訴狀は東京本社に通達されたもので現地の湯本と、どの程度連絡して居るか、此處複雜な派閥と暗流がある因みに重役左記、

取締役会長　大貫經次
〃社長　大越新
常務取締役　中村豊

青山榮、金越智英男、鄰榮源作、小林世志三郎、飯島隆俊、根本石行、齋藤俊夫、原與三郎(監査役)諸氏でこんな事はどうでも良いのだが、十一月五日午後一時から地裁平支部で第一回公判が開かれる理である、但しこの公判は準備手續期日と申して關係原告、被告、辯護士、その他事件に關係ある人々で原則として一般傍聽は許されないそれが三回位ひつついて平大法廷の公開公判は十二月十日頃と見られて居る、係り判事は支部長代理平岡省平判事で前號報導の通り合議制となり郡山か、福島より出張判事、二名、合議制は割り切つた數では駄目らしく奇數即ち三名か、五名だとの話である。原告側の辯護士は本紙履報の通り被告側はまだわからぬ、決定せぬものの如くである

歌扇会第一回勉強会

平市藝妓屋組合藝妓一同にて組織する歌扇会、第一回勉強会は十月十四日(日曜)午後一時より新舞台なれる平市公会堂日本間にて熱演された、

組合長の白土喜伯氏の挨拶にはじまり、暮れかゝる頃まで邦樂と舞踊の熱演が展開された、觀覧者は滿員、招待席には常磐炭礦の木山氏夫人令嬢等遠く磐城、常磐方面からの藝道愛好者も居られた様だ、豬狩觀得翁(元鐵道關係)佐藤祥等との同席も以外であつた、出場藝妓諸君の素顔がうけられた様である、長唄雛鶴三番叟、端唄萩桔梗、全員葛か原、金紅葉の橋、長唄小鍛冶これは一寸わかる様な氣がした、小唄數番、長唄、都鳥、清元四君子、長唄島の千歳清元青海波、清元津山の月最後に長唄通獅子、親獅子が美代子仔子かおはん實に堂に入つたもので勉強会は通り越して白土組合長の挨拶の通り、日頃藝道の修得練磨に精進の程がうかがわれる、觀衆の拍手は伊達に出るものでなかろう

要は筆者は小唄、清元、長唄、端唄等邦樂が好きなのだ然し洋樂をけなすものではない、三味線(三スヂ)と小鼓、大鼓が合流する音波それに連れて立方の禮儀の正しい自然な動靜!!!洋樂西洋舞踊乱舞親子兄弟などでは顏をしかめずしては見て居られぬ所謂、ジヤズ、露骨いや筆の趣りで、色、夕ロの排反になつたが各々趣味があるから批判はやめる惜しむらくは當日は日曜なので何もわらぬ小供が觀衆者の大半を占め、殊に筆者の側には竹林病院の令嬢等やかましい小供衆と木山夫人に隨行の寫眞とりには公憤をおぼいたこういう催しは同好同趣味のものを集める事にして勿論、それが趣味をもつなら小供なら無趣味の大人より有意義である事です、いづれ第二回と公開するであろうから入場料でなくとも費用は觀衆の負擔をうけるがよい無料だからあゝいう騒然となり折角熱のある演藝が効果百パーセントにならない、右は觀衆の一人として印象をかいたのだがそれが指導に當つた左の人々の努力に謝意を表すが責任者である……

組合長白土先生方々が反省会でも開いて觀衆の聲、(批判)を聞くべきである、こういう邦樂と農村と直結してもらいたいのだが稲刈りや田植のときは絶察駄目でやはり色街と農村、農村と都会は別世界となるか。呵々だが、望むらくはこういう静かな樂と踊りを農村の人々にみせたいものである、農村ではたまに映畫位で實際めぐまれぬ然し自然の野鳥や草木水の流れ、波濤の音月光水の如く流るゝ自然の美それは農村ならでは滿きつし得ぬ事だ

舞踊指導　花柳登代職
清元指導　清元松之助
長唄指導　杵屋十茂代
鳴物指導　望月左三郎
小唄指導　花柳は滿豊
小物指導　島木　清

動中静観(社告)

山野邊眞立

駒忠事件も平の八幡小路までごぎつけた、これからは判事検事と辯護士にまつしかない、磐城市も岩出もアカるくするのも秋収穫とマキもの終了後にする、西丸一翁との香眞毛行脚もその後にしてもらいたい、眞立は半農半文の生活であるしばらく休職を宣告するが農屋(テマドリ)をたのめればその限りにあらずである事を附記して置く

(白土喜伯氏の仕舞ぶり橋辨慶)

平市藝妓屋組合

組合長　白土喜伯氏

山形屋	電一二七	喜美松、小とみ、喜多子、小浪
竹むら	電六三二	三子、たより、絹代
浦船	電七七二	小きん、小ぼたん
桐の家	電一三九三	二郎、小三
夢の家	電六六八	遊子、おはん
花蔦家	電一三九九	花奴、胡蝶、花寶、ぼんた、あつ子
ふく文	電一四一四	二三子
大國	電六六〇	初彌、乙女、葉子、三千代、おでこ
藤の家	電九七六	山路、小藤
壽	電二一八三	琴丸、かるた
辰巳家	電二九二	高丸
鈴元	電一二九一	兒太郎、佳世、佐知子
分竹村	電一五九〇	蔦次
分桐	電一六〇七	一奴

(昭和卅一年十月現在)

平市料理店組合

組合長　大谷傳長氏

谷口樓	電話八	田毎	六三二
越乃家	八八九	魚榮	一一一六
月廼家	三〇四	金みよし	四一九
松木樓	一一三	八千代	三七五
石川亭	四三	みしま	九一五
初音	一四五五	山茶莊	五二〇
かすみ	四六三	福元	六四五
梅林	一三〇	ときわ	二二六
春の家	三一〇	君よし	一九四三
松富	二四七	三益	三三一